『ユリシーズ』第 16 挿話における ブルームとスティーヴンの音楽談義

中　尾　真　理*

Stephen and Bloom's Chat about Music in Episode 16 of *Ulysses*

Mari NAKAO

要　旨

ジョイスの作品ではしばしば、音楽が人の心を結びつける場面で使われる。

『ユリシーズ』第 16 挿話で、ブルームは初めてスティーヴンと親しく言葉を交わすが、会話は一向にはずまない。二人の気質が、小市民と詩人でまったく異なるのが原因である。会話中二人の視線は合うが、スティーヴンは「ぼくは除外してください」と拒絶の言葉を投げかける。それでも挿話の最後で、二人は腕を組んでブルームの家に向かう。二人の心が交い始めたのは、音楽に話題が移ってからである。スティーヴンは 17 世紀のリュート奏者、ジョン・ダウランドの話をし、「若き日はこれにて終わりぬ」という歌を歌う。

時刻は午前二時、これ以後、『ユリシーズ』は視覚のきかない聴覚と闇の世界に入って行く。

ブルームとスティーヴンのわずかな接点となる音楽談義を中心に、ブルームの助言、清掃馬車の馬の動きにも注目しつつ、すれ違う二人の心の交流を考える。

キーワード：音楽、ジョン・ダウランド、リュート、交流

I　はじめに

本稿では『ユリシーズ（*Ulysses*）』第 16 挿話におけるレオポルド・ブルーム（Leopold Bloom）とスティーヴン・ディーダラス（Stephen Dedalus）の交流を、挿話の最後で交わされる二人の音楽談義を中心に見ていくことにしたい。

ジェイムズ・ジョイス（James Joyce）の作品では、登場人物の心の交流に音楽がしばしば重要な役割を果たしている。例えば、「土くれ（Clay）」の末尾のマライアの歌や、『若き芸術家の肖像（*A Portrait of the Artist as a Young Man*）』第四章第 2 セクションの最後の弟妹たちとの合唱は、家族の絆（「土くれ」の場合は疑似家族）を確かめあう場面で使われている。どちらの場合も、

2020 年 10 月 1 日受理　*名誉教授

その交流は完全なものではなく、微妙なものである。[1] しかしながら、不完全とはいえ、歌声によってその場に居合わせた人々の、心が溶けあう状況が現出できているのも確かである。

さて、第16挿話は、『ユリシーズ』の第三部の最初の挿話である。『オデュッセイア（*The Odyssey*）』でいえば、20年ぶりに故郷に戻ったオデュッセウスが息子テレマコスと心を合わせて我が家の財産を食いつぶしていた求婚者たちと戦い、貞淑な妻ペネロペイアと再会する。オデュッセウスの長い苦難と冒険の最後を飾る「帰郷（Homecoming）」の部分にあたるのが『ユリシーズ』第三部である。第16挿話はその第一段階で、父と子が協力して、モリーの待つエクレズ街の家に戻る部分となる。次の第17挿話はエクレズ街のブルームの家の台所の場面で、二人はココアを飲みながら親しく語りあう。しかし、この後、スティーヴンはブルーム家には留まらず、夜の闇の中に消えていく。父と子の心の交流が果たして達成されたのか、いささか微妙な展開である。とはいえ、長編小説『ユリシーズ』中で二人の主人公の心の交流があったとすれば、それは第17挿話を置いて他にはなく、第16挿話はそこへ至る前段階である。そこで、これから順次、第16挿話中の二人の心の動きを見ていくことにするが、特に音楽の力に注目することにしたい。作者のこれまでの音楽の使い方に加えて、第17挿話ではスティーヴンとブルームが国歌を交換し、スティーヴンが「ハリー・ヒューズの歌」を歌うものの、あるいは歌ったがために、結局はすれ違い、離れて行くことを視野に入れれば、第16挿話での音楽談義にも注意を払う必要があると思われる。

II　かみ合わぬ会話

1　疲れた聴き手

第15挿話で、スティーヴンは二人の英国兵といざこざを起こし、殴られて昏倒した。その後、スティーヴンはブルームに助けられて夜の街を後にした。続く第16挿話では、飲みものを欲しがるスティーヴンを気遣い、ブルームは夜更けでも店を開けている、バット橋付近の御者溜まりへ連れていく。

しかし、あれこれ話しかけるブルームに対し、スティーヴンは欠伸をし、無口である。ろくに口をきかないスティーヴンに向かって、ブルームはほぼ一方的に話し続けており、二人の交流がうまく行っているとは言い難い。[2] 実のところ、第16挿話は、疲れたスティーヴンがいささか、うんざり気味に聞いている俗人ブルームの独演会といった感がある。内容から見ても、ブルームはスティーヴンに、この日の経験を細々と語っており、重複が目立つ。[3] そのうえ、第16挿話には言い誤り、決まり文句（cliché）が目立ち、冗長である。[4]

そのため、第16挿話は「疲れた男の言語で書かれており、退屈である」（Budgen, 225, Ellmann, 151）と言われてきた。しかし、この疲れた男はブルームだろうか。ヒュー・ケナー（Hugh Kenner）は、第16挿話が「ブルームのスタイル」で書かれていることを認めているが、しかし、ブルームは疲れているどころか、スティーヴンを意識して存分の活躍を見せ、「得意の絶頂にある（This is his finest hour.）」とも言っている。[5] 確かに、ケナーの指摘通り、第16挿話で話しているのはもっぱらブルームであり、疲れているのは聞いているスティーヴンの方だろう。ステ

ィーヴンは夜の街で母親の亡霊に怯えてシャンデリアを壊し、英国兵に喧嘩をふっかけた。疲労していないわけはない。

ところで、内容的に目新しさに乏しい挿話であると先に述べたが、本挿話にも新しい情報はあり、発展がないわけではない。この挿話で読者が新たに知ることをあげてみると、(1) Murphy という赤ひげの船乗りのほら話（特に、サイモン・ディーダラスという射撃の名人の話）(2)「山羊皮（Skin-the-Goat)」の異名を持つ無敵党員フィッツハリスと噂のある、御者溜まりの店主と客たちの議論、(主に愛国者の視点から英蘭問題がとりあげられる）(3) 店主と客たちによるパーネルとオシー夫人をめぐる議論（聞いているブルームは、かつてパーネルに帽子を手渡してやった「事実」を思いだす)、そして最後に、(4) ブルームとスティーヴンの音楽談義である。

では、(1) から (4) の各段階での二人の心の交流を追いつつ、音楽談義に至る経緯を順に見て行こう。

2　小市民 vs. 詩人

中年の広告取りブルーム（Mr Bloom）と詩人志望の青年スティーヴンが異なる階層の、異なる価値観の持ち主であることは、第 16 挿話の直前に印象的に示されていた。

第 15 挿話の最後は、気を失って倒れていたスティーヴンが、イェーイツの詩を呟きながら、意識を取り戻すところで終わっていた。この時、スティーヴンが息を吹き返すのと同時に、ブルームの前に死んだ息子ルーディ（Rudy）の亡霊が現われている（15:4963-67)。これが第 15 挿話の最終場面である。まるで活動映画の一場面のように、忽然とブルームの前にルーディの亡霊が現れた。この亡霊は、象牙のステッキを持ち、イートン・スーツを着た若い紳士の姿をしていた。頭には商業神マーキュリーを表すヘルメットをかぶり、チョッキのポケットからは子羊がのぞいている。子羊はキリストの象徴であると同時に、商業神の象徴でもある。ルーディは、英国国教会からカトリックに改宗したブルームの息子である。ところで、ブルームの父ルドルフ・ヴィラグ（Rudolf Virag）はハンガリー出身のユダヤ人（17:1869-72）である。ルドルフ・ヴィラグは行商をしていたと考えられ、ブルームも小間物の行商から始まって今は新聞社の広告取りだから、ブルーム家は少なくとも二代前から旅商人の家系である。ブルームの息子ルーディの亡霊が、商業神のヘルメットに、宝石を身につけた若紳士の姿で現れるのはそのためだろう。詩人・芸術家スティーヴンと、旅する商人であるブルームの違いを強く印象づける場面で 15 挿話は終わっていた。

続く第 16、17 挿話では価値観の異なる二人が差し向いとなり、語り合うわけだが、どのように交流が行われるのだろうか。第 16 挿話では、ブルームの話し口調をそのまま移したような文体と、不機嫌に黙りがちなスティーヴンとの会話から、両者それぞれの identity が浮かび上がってくる。[6] 無口なスティーヴンと対比されることで、ブルームの能弁ぶりが際立っている。

ブルームは「よきサマリア人」らしく親切で、浅薄ではあるが博学で議論好きな性格である。二人が御者溜まりに入っていくところを見てみよう。

Mr Bloom and Stephen entered the cabman's shelter, an unpretentious wooden structure, where,

prior to then, he［Stephen］had rarely if ever been before, the former［Bloom］having previously whispered to the latter a few hints anent the keeper of it said to be the once famous Skin-the-Goat, Fitzharris, the invincible, though he could not vouch for the actual facts which quite possibly there was not one vestige of truth in. A few moments later saw our two noctambules safely seated in a discreet corner only to be greeted by stares from the decidedly miscellaneous collection of waifs and strays and other nondescript specimens of the genus *homo* already there engaged in eating and drinking....（16:320-30. Underlines are added.）

ブルームはスティーヴンを「簡素な木組みの御者溜り」に案内した。スティーヴンなどは、おそらくそれ以前には入ったこともないだろうと、語り手（ブルーム）は言っている。そして店主は「あの昔有名だった山羊皮だと噂されている」ことを、予備知識としてスティーヴンに教えている。もっとも、慎重なブルームは、その情報の信憑性については「実際に事実であるかどうかは保証できないし」、また「その事実だって真実のかけらもない可能性もある」と二重の留保をつけている。用心深く、断定をしないのは、さまざまな職種の営業で世の中を渡ってきたブルームに染みついた姿勢なのだろう。二人が他の客たちの視線（stares）を意識しながら席につくところなど、いかにもブルームらしい。スティーヴンの方は、他の客の存在など気づいてもいないだろう。また、下線部で示したように、自分たちのことは「我らが二人の夢遊病者」と理想化する一方で、他の客のことは「放浪者、無宿人、その他まるで得体の知れない人類の見本みたいな輩の雑多な集合」と乱暴に一括しているところなど、いかにもブルームらしい言葉使いである。三人称の記述ながら、あたかもブルームが話しているような口語調が感じられる。

さて、このような状況で、親子ほども年齢が違い、文化も言葉も違う二人はどのように交流するのだろうか。

大学出のスティーヴンを前にして、古典の教養のないことを自覚しているブルームは、スティーヴンの学識にあわせようと、イタリア語や詩、シェイクスピア、肉体と霊魂の問題などを次々に話題にする。しかし、度々引用を間違い、教養のないことを露呈する。もっとも、会話で言い間違いがあるのはよくあることで、紋切り型の cliché も、会話を途切れさせないためのテクニックと言えるかもしれない。

とはいえ、夜更けの御者溜まりという非日常的な空間にもかかわらず、全体として、ブルームは世間慣れした「広告取り」らしく、考え、かつ、語っている。老船乗りマーフィのほら話に対しても、合理主義者のブルームは懐疑的である。[7] マーフィの航海奇談を聞きながら『イノック・アーデン』の帰還の場面を思い浮かべたりしているが、そこから発展する想像は、以前から考えていた「水曜日か土曜日にでも、長い船旅をへてロンドンへ旅行しようという長年温めていた計画（a longcherished plan he meant to one day realize some Wednesday or Saturday of travelling to London via long sea）」（16:499-501）を実行に移そうというものである。しかも、マーティン・カニンガムにパスを頼んで旅費を安くあげようと、費用の面に意識が向く。「夏期の演奏旅行の契約をとりつけながら観光して回るのもいいのではないか、マーゲイトとか・・・・著名な歓楽地を含めて（he might have a gaze around on the spot to see about trying to make arrangements about a

concert tour of summer music embracing the most prominent pleasure resort....)」(16: 516-22) という計画はいかにもブルームらしい。ブルームの想像は常に実利的で、営業マン的な想像なのである。

3　ブルームの助言とスティーヴンの反応

ブルームの気遣いにもかかわらず、スティーヴンは一向に会話に乗ってこない。プチ・ブル（小市民）と詩人という気質の違いが第一の原因だが、いま一つの理由は、ブルームの話す内容が、父親のお説教のようであるからである。[8)] スティーヴンが一昨日からまともな食事をしていないことを知ると、コーヒーと菓子パンを摂るように勧め、泊まる場所の心配をするところなど、母親のようでもある。お説教をする親に対する子の常として、スティーヴンは欠伸をしながら、ろくに聞いてもいない。この状態は、ブルームが望む対話による親密な議論には程遠いのだが、それでも、一か所だけスティーヴンがブルームのお説教に敏感に反応しているところがある。それはブルームが友人について注意をしたところで、ただ一人をのぞくすべての呑み友達に、スティーヴンが見捨てられていることを指摘し、「医学生の友人たちがしているのは卑劣な裏切りですよ（a most glaring piece of ratting on the part of his brother medicos under all the circs.)」(16: 96-7) と非難した時である。それまで沈黙していたスティーヴンが、これには、「しかも、そいつはユダだった（—And that one was Judas,)」(16:98) と、即座に反応している。

ウェストランド・ロウ駅で「ただひとり」スティーヴンを見捨てず、一緒に夜の街へ行ったのはリンチだが、そのリンチも裏切り者であったと、ブルームの言葉に頷くのである。マリガンについてブルームは、特に名指しで非難し、「彼は、君の頭脳を盗んでいるといってもいいのですよ（he is what they call picking your brains)」(16:298-99) と言っている。これは「簒奪者（usurper)」(1:744) マリガンの本質を言い当てた指摘だが、スティーヴンは黙ったままである。

4　視線による会話

あれこれ話しかけるブルームに対し、反応の鈍いスティーヴンであるが、二人は話の途中で、幾度か視線を交わしている。第 16 挿話中、二人の視線は三回合っている。一回目は赤毛の船乗りマーフィが折り畳みナイフを見せながら、イタリア人の刃物の扱い方について意見を述べる場面で、この時二人は「本能的に意味ありげな視線を交わし（both instinctively exchanged meaning glances,)」ている (16:594-95)。ここで二人は視線を交わすことによって、マーフィの航海談が信ずべきものでないことを相手に伝え、また相手も自分と同意見であることを確認している。

しかし、二回目 (16:1091-93) と、三回目 (16:1146-47) では、両者の意見が一致しているとは言い難い。

まず、二回目に視線が出会う場面である。

二人の周りでは赤毛の船乗りのほら話に続いて、店主の「山羊皮」がアイルランド賛美の議論を始める。ブルームはそれを聞きながら、愚にもつかぬ戯言だと腹立たしく思う。内心憤激した彼は、[9)] 自分もユダヤ人であるとスティーヴンに打ち明け、神も自分と同じユダヤ人であるという、第 12 挿話での体験と得意の自説を披露する。「ぼくの意見は間違っていないだろう？（Am I not right?)」とスティーヴンに問いかけるブルームの眼には、媚びるような色さえ見えている（with

a glance also of entreaty）。

.....He called me a Jew and in a heated fashion offensively. So I without deviating from plain facts in the least told him his God, I mean Christ, was a jew too and all his family like me though in reality I'm not. That was one for him. A soft answer turns away wrath. He hadn't a word to say for himself as everyone saw. Am I not right?

He turned a long you are wrong gaze on Stephen of timorous dark pride at the soft impeachment with a glance also of entreaty for he seemed to glean in a kind of a way that it wasn't all exactly.

—*Ex quibus*, Stephen mumbled in a noncommittal accent, their two or four eyes conversing, *Christus* or Bloom his name is or after all any other, *secundum carnem*.（16:1082-93）（Underlines are added.）

これに対し、スティーヴンは聖書（「ローマ人への手紙」）の一節を引用して、「その民族からキリストもブルームも、人としては生まれたのですから」と、一応、ブルームに賛成している。この時、二人は二回目の視線を合わせている（引用 2 つ目の下線部）。

視線を合わせるという意味で、普通に使われる動詞は meet だが、ここでは converse という語が使われていることに注目したい。二人の二つの、あるいは四つの目が、会話を交わしている（converse）のだ。しかし、視線は合っても、ブルームとスティーヴンの心が一つになったとは言いがたい。次の引用文でわかるように、スティーヴンは、実はブルームの話をよく聞いていなかった。ブルームは、暴力と不寛容には反対であること、自分は本物のアイルランド人で、愛国主義者だと得意の持論を展開していたのだが（16:1132-40）、その間、実は、スティーヴンは呆然自失状態で、ほとんど聞いていないのである。

Over his untastable apology for a cup of coffee, listening to this synopsis of things in general, Stephen stared at nothing is particular. He could hear, of course, all kinds of words changing colour like those crabs about Ringsend in the morning burrowing quickly into all colours of different sorts of the same sand where they had a home somewhere beneath or seemed to. Then he looked up and saw the eyes that said or didn't say the words the voice he heard said, if you work.（16:1141-47）（Underlines are added.）

スティーヴンは朝の浜辺を思い出しながら、ブルームの話を注意散漫に聞き流し、「特に何も見てはいなかった（Stephen stared nothing is particular.）」のである。言葉はその朝スティーヴンが浜辺で見た小さな蟹のように、ただ色を変えていくだけで、意識を上滑りし、何の意味ももたらしていない。では聴いていたのかというと、周囲の議論や騒音に邪魔され、これまたよく聞いていなかった。スティーヴンは途中で顔を上げ、何か言っているブルームの目を見る（引用 2 つ目の下線部）。

両者の視線が三回目に出合うのは、この時で、まったくの偶然であった。注意散漫なスティーヴンの耳に残ったのは、ブルームの議論の最後の if you work という部分だけである。

ブルームが同意を求めているのを知ったスティーヴンは、間髪を入れずに、それを拒絶した。

—Count me out, he［Stephen］managed to remark, meaning work.

The eyes were surprised at this observation because as he, the person who owned them pro tem. observed or rather his voice speaking did, all must work, have to, together.（16:1148-51）（Underline is added.）

視線が合った時にスティーヴンが発したのは、「ぼくは除外してください、その働くということですが（Count me out....meaning work.）」という言葉だった。スティーヴンは正確な状況把握ができていず、そんな言葉は言わなかったのかもしれないとも思っているのである。一方、ブルームからすれば、自らのアイデンティティとユダヤの歴史を絡めて、第 12 挿話での体験を熱く語ったというのに、スティーヴンが発した言葉は「ぼくは除外してください」という拒絶の言葉だった。驚くブルームの目（The eyes were surprised at the observation....）。

ブルームは驚きのあまり、言い訳を始めるが、スティーヴンはそれをさえぎって、「アイルランドは僕の一部であるからこそ、重要なのだと思います（But I suspect, Stephen interrupted, that Ireland must be important because it belongs to me.）」（16:1164-65）と言い放つ。まるで、ブルームなど議論をする相手でないかのような態度である。スティーヴンの芸術家としての ego が露わになった瞬間と言えるだろう。

このように、第 16 挿話では視線が合っても、恋人同士のように心の交流がかなうわけではない。しかも、夜の時間帯であることから、視覚そのものが働かなくなっている。第 16 挿話以後、『ユリシーズ』はますます視覚では確認できない闇の世界へ突入する。すでに時刻は午前二時近く、外は寝静まっている。眠っているガムリーはもはや「元ガムリー（ex Gumley）」（16:1726）に変形しており、昼間とは異なる次元の世界に入ったようである。続く第 17 挿話はランプと星明かりの、夜のエクレズ街のブルームの家だ。第 18 挿話に至っては夜明けのベッドの物思いで、読者にはモリーの姿さえ見えない闇の世界である。

III　音楽談義

1　リュート奏者ダウランドと歌曲「若き日はこれにて終わりぬ」

このように第 16 挿話のスティーヴンとブルームは、言葉や視線をかわしてはいても、意気投合しているとは言い難い状態にある。ブルームの議論も、視線による会話も、二人の心の交流に役立っているとは言えないのである。それにもかかわらず、挿話の最後になると、バラッドの一節「マー神父に結婚式をあげてもらう（*to be married by Father Maher*）」にあるように、二人は仲良く語らいながら、エクルズ街に向かって遠ざかって行く様子が描かれる。仲のよさそうな二人の後姿を、清掃馬車の御者が見送る形で第 16 挿話は終わっているのだ。ブルームに腕をとられた時、スティーヴンは強い違和感を覚えるが（16:1723-24）、にもかかわらず腕を引っ込めることもなく、そのままブルームと共に歩いていく。急に二人の心が交流し始めたわけでもないだろう

に、なぜだろう。

二人の話題が音楽に移ったからである。

> So they turned on to chatting about music, a form of art for which Bloom, as a pure amateur, possessed the greatest love, as they made tracks arm in arm across Beresford place.（16:1733-35）

スティーヴンとの話題に困ったブルームは、「山羊皮」たちのパーネル再来説を聞きながら、歌手である妻モリーの話をした。パーネルとオシー夫人のスキャンダルからの連想である。オペラ歌手マダム・マリオン・トゥイーディの夫であることは、ブルームの自慢で（16:1437）、誇らしげにスティーヴンに写真を見せてもいる。その後、「聖母は立てり（*Stabat Mater*）」などの宗教音楽を話題にすると、スティーヴンはすぐに乗ってきて、シェイクピアの songs を賛美し始める。そればかりか、シェイクスピアの時代に、フェッター小路に住んでいたリュート奏者ダウランドの名前を出してくる。

> ....Stephen, in reply to a politely put query, said he didn't sing it but launched out into praises of Shakespeare's songs, at least of in or about that period, <u>the lutenist Dowland who lived in Fetter lane near Gerard the herbalist</u>, who *annos ludendo bausi, Doulandus*, an instrument he was contemplating purchasing from Mr Arnold Dolmetsch, whom B. did not quite recall though the name certainly sounded familiar, for sixtyfive guineas and Farnaby and son with their *dux* and *comes* conceits and Byrd（William）who played the virginals, he said, in the Queen's chapel or anywhere else he found them and one Tomkins who made toys or airs and John Bull.（16:1760-69）（Underline is added.）

スティーヴンがダウランドの話をするのは、『ユリシーズ』中でここが初めてである。それだけではない。スティーヴンは 65 ギニーもするリュートの購入を考えていると言って、ブルームを驚かす。さらに作曲家ファーナビー父子（Giles Farnaby, c.1563-1640. Richard Farnaby, b.1590）やオルガン奏者ウィリアム・バード（William Byrd, 1543-1623）、同じくトーマス・トムキンズ（Thomas Tomkins, 1572-1656）とジョン・ブル（John Bull, 1562-1628）など、17 世紀イングランドの音楽家の名前を次々にあげる。ダウランドとバードの名は、『若き芸術家の肖像』第 5 章にも出て来るが、スティーヴンが堰を切ったように、これら音楽家について語りだすのは、読者としてもちょっとした驚きである。中でも、ダウランドとリュート購入の話題が注目される。

というのも、ダウランドの名前が出て来るのはここが初めてだが、フェッター小路の名前は、植物学者ジェラードの薔薇園と結び付けて、第 9 挿話と第 11 挿話に登場していたからである。

> Do and do. Thing done. In a rosary of Fetter lane of Gerard, herbalist, he walks, greyedauburn.（9:651-52）

> In Gerard's rosary of Fetter lane he walks, greyedauburn. One life is all. One body. Do. But do.（11:

907-8）

しかし、第 9 挿話でジェラードの薔薇園を歩いていた、白髪交じりのトビ色の髪の「彼（he）」は、スティーヴンがシェイクスピア論を展開していたことから、シェイクスピアであると思われた。ダウランドの名前はあがっていなかった。ここに至って初めて、この「彼」はダウランドであった可能性が浮上する。

ジョン・ダウランド（John Dowland, 1563?-1626）はリュート奏者で作曲家、ダブリン近郊のドールキー（Dalkey）の生まれである。ドールキーは第 2 挿話ディージー校長の学校のあるところだ。ダウランドはカトリック教徒であったため、デンマーク王室などに仕えた後、イギリスに戻り王室付きリュート奏者となった。リュートという楽器については[10]、第 15 挿話でスティーヴンがリンチに、「リュートについて問い合わせる手紙を見せたかな？（Lynch, did I show you the letter about the lute? ）」（15:2508-09）と言っている。しかし、第 15 挿話でリュートについて触れていたのは、これだけで、ダウランドの名前は出てこず、ただ「リュートについての手紙」としか言っていない。したがって、この時点では購入計画のあることまでは、わからなかった。本挿話で初めて、スティーヴンが 65 ギニーもする高価な楽器を買おうとしていたことが、読者にわかるのである。

実はダウランドの名前は『若き芸術家の肖像』第 5 章にも登場している。国立図書館の円柱の前で、スティーヴンが通り過ぎるエマを見送り、ナッシュの詩句を連想する場面である。

> He walked away slowly towards the deeper shadows at the end of the colonnade, beating the stone softly with his stick to hide his revery from the students whom he had left: and allowed his mind to summon back to itself the age of Dowland and Byrd and Nash.（Underline is added.）（*A Portrait of the Artist as a Young Man*. p.253）

ここにはダウランドと並んでバードとナッシュの名前もあげられている。また、この直前には「暗くなっていく大気の中を彼女が通ったからか？それとも暗い母音と豊かでリュートのような第一音のある詩のせいだろうか（Her passage through the darkening air or the verse with its black vowels and its opening sound, rich and lutelike?）」という、リュートへ寄せるスティーヴンの言及もある。

この頃のスティーヴンは、エマへの想いを 16、7 世紀に流行っていたヴィラネル（villanelle）詩にしようとしていた（ヴィラネルは 19 行の田園詩）。

また、リュートについて言えば、『ダブリン市民（*Dubliners*）』の「レースの後で（After the Race）」においてハンガリー人ピアニスト、陽気なヴィローナ（Villona）が古楽器リュートの愛好者である。ヴィローナは地味な人物だが、短編の最後で、享楽的な一夜を過ごした青年たちに“Daybreak, gentlemen!”と夜明けを告げる重要な役を振り当てられている。17 世紀音楽と古楽器リュートはスティーヴンにとって、また、ジョイスにとって、特別な意味を持っていたと考えてよいだろう。（リュートは 20 世紀初頭に復活をとげた古楽器でもある。）

さて、ブルームはスティーヴンに劣らず音楽好きで、プロテスタントの讃美歌よりカトリック教会の音楽を好むなどとスティーヴンに話しているが、彼が日ごろ親しんでいるのは『ドン・ジョバンニ』や『マルタ』など軽いオペラ（light opera）である。したがって、音楽談義といっても、二人がそれぞれの好みの音楽について語っているだけで、双方の話が深まるわけではない。しかし、音楽の話題がスティーヴンの心を解放した（あるいは心の琴線に触れた）からこそ、スティーヴンは楽器購入のことをブルームに話したのだろうし、さらに音楽に託して心情を吐露することになったのだろう。

というのも、スティーヴンはこの後、オランダのオルガン奏者･作曲家のスヴェーリンク（Jans Pieterszoon Sweelinck, 1562-1621）の「若き日はこれにて終わりぬ（*Youth here has End*）」という曲による変奏曲の解説をし、海の精サイレンに関する露骨な言い回しでブルームを驚かせた後、ドイツの作曲家・聖歌隊指揮者ヨハネス・イェープ（Johannes Jeep, c.1582-1650）の古い歌曲を歌ってみせるからである。（わざと露悪的な言葉遣いをし、滑稽調にするのはマリガンとスティーヴンに共通の特徴である）

> Exquisite variations he was now describing on an air *Youth here has End* by Jans Pieter Sweelinck, a Dutchman of Amsterdam where the frows come from. Even more he liked an old German song of Johannes Jeep about the clear sea and the voices of sirens, sweet murderers of men, which boggled Bloom a bit:
>
> *Von der Sirenen Listigkeit*
> *Tun die Poeten dichten.* （16:1810-16）

イェープの歌曲は詩人の詩作に関するものである。「詩人」スティーヴンはこの歌に託して、詩人としての自分自身を語っていると考えられる。スティーヴンはここで、彼の青春時代が終わったことを告げているのだ。[11)]

一方、ブルームは、スティーヴンの父親譲りの美声を聞きながら、妻モリーと二人で、スティーヴンを声楽家に仕立て、ダブリンの社交界に売り込む計画の想像を膨らませる。スティーヴンを引き入れて、モリーと新たな家族関係を樹立しようという構想もわく。スティーヴンの歌によって、二人の心が完全に溶け合ったわけではない。しかし、少なくとも、ブルームの側にはそのような希望が生まれ、スティーヴンも心情の幾分かを吐露することができた。だからこそ、睦まじく音楽を語る二人という後ろ姿で、第 16 挿話を終えることができたのだろう。

IV　清掃馬車の馬の役割（結論）

音楽を通じて、二人の心の交流がある程度できた段階で、ブルームは再び、父親らしい忠告を試みている。あたりに人気はなく、ただ一頭の馬が引く清掃馬車が路上を清掃しているだけである。静かな夜更けの路上に､清掃機（sweeper）の音が響く。間近かで馬が方向転換するのを見て、ブルームは｢今宵はわれわれの命が危険にさらされていますぞ。スチーム･ローラーにご注意（Our

lives are in peril tonight. Beware of the steamroller.）」（16:1780）と注意している。スティーヴンの歌の滑稽調に合わせて、冗談めかした口調である。ところが、この馬の姿が、ブルームにはよく見えていない。

> They thereupon stopped. Bloom looked at the head of a horse not worth anything like sixtyfive guineas, suddenly in evidence in the dark quite near so that it seemed new, a different grouping of bones and even flesh because palpably it was a fourwalker, a hipshaker, a blackbuttocker, a taildangler, a headhanger putting his hind foot foremost the while the lord of his creation sat on the perch, busy with his thoughts.（16:1781-86）（Underline is added.）

立ち止まったブルームが最初に見たのは、「およそ 65 ギニーの値打ちなどなさそうな馬の頭（the head of a horse not worth anything like sixtyfive guineas）」だった。ところで、馬の頭は楽器のリュートに似ている。[12] そこでブルームは、リュートの値段にひっかけて「およそ 65 ギニーもしそうもない馬の頭」を見たのである。

この後、リュート型の頭部に続いて、ブルームが見たのは、「四足で歩いているやつ（a fourwalker）、腰を振っているやつ（a hipshaker）、黒い尻のやつ（a black-buttocker）、尻尾をだらりとさげたやつ（a taildangler）、首うなだれたやつ（a head-hanger）」だった。夜の闇の中で、ブルームにとって馬はもはや昼間目にする一頭の馬のようには見えていない。馬はブルームの目の前の視野に入る、足や腰や尻、尻尾という触知可能な部分でしかないのである。

この後、スティーヴンが「若き日はこれにて終わりぬ」という歌の解説をした後、イェープの曲を歌う。その美声を聞きながらブルームがスティーヴンを歌手として売り込む計画を立てるのは、前述のとおりだが、その後で、三度目の助言を試みている。計画実現への具体的な策として、マリガン（ある有望な開業医）との交友を断つようにと改めて助言したのである（引用下線部）。

> The horse was just then. And later on at a propitious opportunity he purposed（Bloom did）, without anyway prying into his private affairs on the *fools step in where angels* principle, advising him to sever his connection with a certain budding practitioner who, he noticed, was prone to disparage and even to a slight extent with some hilarious pretext when not present, deprecate him, or whatever you like to call it which in Bloom's humble opinion threw a nasty sidelight on that side of a person's character, no pun intended.
>
> The horse having reached the end of his tether, so to speak, halted and, rearing high a proud feathering tail, added his quota by letting fall on the floor which the brush would soon brush up and polish, three smoking globes of turds.（16:1866-77）（Underline is added.）

sidelight と side を重ねて、「語呂合わせじゃないよ（no pun intended）」と付け加えているのが、いかにも駄洒落好きのブルームらしい。

この時、馬はブルームの助言に賛同の意を表するかのように、誇らしげに尻尾を掲げて、勢い

よく三つの馬糞（three smoking globes of turds）を落とした。

スティーヴンはブルームのこの助言に対して、返事をしていないが、清掃馬車の騒音に負けぬように、今までよりも力強く、バラッドの結句を「そしてすべての船は難破した（*Und alles Schiffe bracken*）」（16:1884）と歌って終わっている。滑稽な落ちである。三つの馬糞は挿話の終わりの、あるいは、歌曲の終わりの、フェルマータ（終止記号）と考えられる。[13)]

（本稿は 2019 年 6 月 8 日の日本ジェイムズ・ジョイス協会第 31 回大会のシンポジウムで、口頭発表したものに加筆・修正し、発展させたものである）[14)]

注

1）“Clay”ではクリスマスの前夜、マライアがジョーの頼みで、*I Dream that I Dwelt* という歌曲を歌う。マライアの弱弱しい歌声はジョーを感動させるが、果たしてそれが居合わせた全員を巻き込む感情とまで言えるかどうかは疑わしい。*A Portrait* の第四章では、外出から帰ったスティーヴンが、貧しいお茶の食卓で合唱する弟妹の歌に、一呼吸置いてから加わっている。スティーヴンはこの日、聖職者にならないかという校長の勧めに、一度は心躍らせたが、その後、広場の軽快な手風琴のメロディーを聞いて、我に返るという体験をした。彼は宗教の秩序に組み込まれることなく、俗世間で生きようという決心をして帰宅したのだ。しかし、すでに人生を諦めたような弟妹たちを見て、彼は後悔の念にとらわれる。長男でありながら家族を顧みず、ひとりで人生の選択をしたからだ。しかし、スティーヴンは弟妹たちの合唱に加わることによって、自分も彼らの一員であることを認識する。弟妹たちにもまた、合唱によって家族の連帯を確認している。

2）このすれ違いを Tindall はブルームがコーヒーと菓子パン（buns）によって「聖体拝領」を試みるが、この communion は不完全に終わったと述べている。Tindall, *Reader's Guide to James Joyce*, p.217.

3）内容的に重複が多いことから、McBride は、逆に第 16, 17 挿話でエクレズ街のブルーム家を訪ねた経験を基に、作家スティーヴンが 4 ～ 15 挿話のブルームを創作したという説を立てているほどである。McBride, *Ulysses and the Metamorphosis of Stephen Dedalus*. See Introduction.

4）この挿話が『オデュッセイア』の第十四書に対応していることも、重複の多い理由の一つ。帰還したオデュッセウスは豚飼いエウマイオスの小屋を訪ねるが、用心して正体を明かさず、でたらめな航海談を語る。French はこの挿話の第一主題を「言葉による騙し（language as deception）」としている。French, *The Book as World*. p.214.

5）Kenner, *Ulysses*, p.130.

6）Peake によると、ブルームはスティーヴンとの対話を試みるが、試みれば試みるほど両者の違いが明らかになるという（Peake, *James Joyce: The Citizen and the Artist*, p.279）。その上で、第 16 挿話は二人が新たなスタートを切るための準備の章だとしている（p.281）。

7）Bruns によると、Bloom は彼独自の commonplace view of things で判断しており、Murphy と Fitzharris の fantasy に対し、ironic but silent chorus の役を果たしているという。Bruns, “Eumaeus” pp.371-76.

8）放蕩息子に寄せる父親ブルームの心配は、この挿話に登場するガムリーとコーリーの存在によって妥当と考えられるだろう。ガムリーもコーリーも、元はよい身分であったが今は落ちぶれている。スティーヴンはどちらにも同情的だが、ブルームは安易な同情には批判的で、スティーヴンが恵まれた素質を放蕩で持ち崩すのを心配している。

9）Schwaber は、calm and cheerful alertness の下でブルームは終始、怒りを抑えていると指摘している。Citizen への怒りも表面以上に大きいものであったに違いない。Schwaber, *The Cast of Characters*, p.128.

10）ブルームの古い隣人マスティアンスキーのシターン（cither）もリュートに似た 16, 7 世紀の弦楽器である。

Cf. And Mastiansky with the old cither.（4:205-06）。

11）Peake は第 16 挿話の最後で、スティーヴンは「青春の終わり」を自覚すると指摘している。C. H. Peake, *James Joyce: The Citizen and the Artist*, p.281.

12）馬の頭とリュートについては 浅井学氏からご教示いただいた。

13）Tucker によると、馬は語り手の linguistic wastes を清掃しているのだという。Tucker, *Stephen and Bloom at Life's Feast*, p.130.

14）シンポジウムの報告は『Joycean Japan』No.31（日本ジェイムズ・ジョイス協会）24-32 頁参照。

参考文献

Bruns, Gerald L. "Eumaeus". *James Joyce's Ulysses: Critical Essays*. Ed. Clive Hart and David Hayman. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1974.

Budgen, Frank. *James Joyce and the Making of Ulysses*. London: Grayson and Grayson, 1934.

French, Marilyn. *The Book as World: James Joyce's Ulysses*. 1976. London: Sphere Books, 1982.

Gifford, Don, with Robert J. Seidman. *Ulysses Annotated*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1988.

Homer. *The Odyssey*. Translated by Robert Fagles. New York: Penguin Books, 1997.

Joyce, James. *A Portrait of the Artist as a Young Man*. Penguin Classics. Harmondsworth, 1992.

Ulysses. Ed. Hans Walter Gabler et at. London: The Bodley Head, 1986.

Kenner, Hugh. *Ulysses*. The Revised Edition. London: The Johns Hopkins U. P., 1987.

McBride, Margaret. *Ulysses and the Metamorphosis of Stephen Dedalus*. London: Associated University Presses, 2001.

Peake, C. H. *James Joyce: The Citizen and the Artist*. London: Edward Arnold, 1977.

Schwaber, Paul. *The Cast of Characters: A Reading of* Ulysses. New Haven and London: Yale U. P., 1999.

Tindal, William York. *A Reader's Guide to James Joyce*. First published in 1959 by the Noonday Press. New York: Syracuse U. P., 1995.

Tucker, Lindsay. *Stephen and Bloom at Life's Feast*. Columbus: Ohio State U. P., 1984.

田村章「虚偽と捏造のテクスト―『ユリシーズ』第 16 挿話を読む―」『金城学院大学論集』人文科学編第 12 巻第 2 号、2016 年。

中尾真理「ブルームとスティーヴンの音楽談義 ― 若き日はこれにて終わりぬ ―」（シンポジウム報告）*Joycean Japan* No, 31. 日本ジェイムズ・ジョイス協会、2020 年。

Abstract

Music sometimes unites isolated hearts in Joyce's works.

In the 16th episode of *Ulysses*, the dissimilarity of the two heroes' minds, hinted at the end of the previous episode, is shown more clearly. Stephen the poet and Bloom the citizen have a stiff tête-à-tête at the cabman's shelter. Bloom, friendly and helpful, is verbose, while Stephen is sullen and silent. Stephen is weary and barely responds to Bloom's fatherly concerns.

Eyesight does not function normally in this chapter, nor does hearing. Although he catches Stephen's eyes three times while talking, Bloom comes to realize each time that Stephen's mind is absent. They are finally able to communicate, to some extent, when Bloom begins to talk about music. Stephen praises John Dowland, the lutenist, and sings "Youth here has End".

It is past mid-night, and the darkness, which is to enclose the next chapter, already hinders Blooms eyesight. He can barely discern the horse's head, four legs and so on. Mockingly he draws Stephen's attention to the road-sweeper's horse before crossing the street. Bloom gives Stephen his final advice to sever the connection with Mulligan, and the horse "just then" drops "three smoking globes of turds". We can take this act as indicating the horse's agreement to Bloom's advice. Or does the horse just want to sweep away such nonsense?

Keywords: music, John Dowland, lute, communication